

巻頭言

ChatGPT という名前を初めて耳にしたのは 2023 年のことだったと記憶している。当時私はそれが何だかよく理解できず、GPT を TPG やら PGT などと言い間違えては学生たちに失笑されたものである。それからあれよあれよという間に生成 AI は社会に浸透し、今ではまさに ubiquitous なツールとなった。ChatGPT や Gemini、NotebookLM などの各種サービスはもはや必需品で、そもそものウェブ・ブラウザを開いてもそこには AI がいる。何かを調べたり、考えたり、作ったりするときのプロセスは激変した。生成 AI を含めた AI 全般の進化速度は驚異的で、それは私たちの知のあり方を大きく揺さぶろうとしている。

AI は賢く、勤勉で、律儀である。文句も言わずにこちらのプロンプトに応じ、しつこく質問をしても嫌な顔ひとつせず、愚痴をこぼせば慰めてくれる。その一方で、時にありもしない文献を教えてきたり、息を吐くように嘘をついたりもする。そして嘘を指摘すると素直に謝ってくる。あまりに素直すぎるのが少々癪に障るぐらいである。人間にはできないことを軽々とやってのける一方で、人間のようなミスもするし、人間にはありえないぐらい裏表がない。いったい何を考えてるんだろう、こいつ？ いや、そもそも AI は「考えている」と言えるのか？ それは単なる機械的な処理なのでは？ とここで「考える」って何？ 考えれば考えるほどわからなくなる。人並みに利用させてもらってはいるものの、やはり私にはこの「人工知能」というものがよく理解できていない。

ただ、よくよく考えてみると、そもそも私たちは人間のことだってさしてわかっていない。人は争い合い、愚かな言動を繰り返す一方で、心を揺さぶるような芸術を生み出したり、利害を無視して他者に手を差し伸べたりもする。深い絶望に陥ることもあれば、絶望から立ち上がることもある。身近にいるはずの家族も友人も同僚も学生たちも謎だらけだ。彼らが何を考えているのか、私には AI 以上によくわからない。よくわからないまま、私は彼らと言葉を交わしたり、笑い合ったり、喧嘩したり、酒を酌み交わしたりする。

人間は人間のことがわからない。だから人間は「人智を超える智」を求めずにはいられなかった。古今東西、私たちは神や霊やさまざまな「不可知のもの」に思いを馳せ、この世のわからなさをそれらに託した。「人智を超える智」について考えることを通じて、人間は言わば「わからなさ」と共存しようとしてきたのである。

今回の本誌は「人智を超える智をめぐる想像力」をテーマにしている。特集論文 3 本からは、文学が「人智を超える智」といかに向き合ってきたのかを垣間見ることができるだろう。このテーマを提案し、かつ編集長を務めてくださった西岡あかね先生、投稿してくださった先生方、編集作業にあたってくれた教務補佐と RA の方々にこの場を借りて深くお礼申し上げる。

なお、この文章が生成 AI によって書かれたものか否かは秘密である。

総合文化研究所長 前田和泉

